

7

お寺は本来交流の場所

平成27年10月20日、教団付置研究所懇話会・第14回年次大会は日蓮宗現代宗教研究所が当番事務局となり、日蓮宗宗務院で開催され、小林順光宗務総長から祝辞をいただいた。教団付置研究所とは教団が運営している研究機関のことであり、仏教、神道、キリスト教、新宗教のさまざまな19研究所が会員、8研究所・団体がオブザーバーとして懇話会は組織され、毎年、東・西交互に年次大会がもたれている。

昨年の大会は真宗大谷派教学研究所が当番事務局として東本願寺で開催され、大本教学研鑽所、NCC（日本キリスト教協議会）宗教研究所、浄土宗総合研究所が発表した。

本年は、神社本庁総合研究所、智山伝法院、中山身語正宗教学研究所が発表し、いずれも興味深いものだった。

〈「教団付置研究所懇話会」発足へのお誘い〉、いわゆる趣意書には次のように述べられている。

その趣旨は、私たち教団付置の研究所は、現代の諸問題にどのような関心を持ち、何をしているのか。それぞれの教義・世界観を基としながら、現代社会に開かれた教団たらしめるべく、どのように努力しているのか。こうした事柄に関して相互に情報を交換し、それぞれの立場を尊重しつつ協力できる可能性を探りたい。そしてこの動きが、教団の差をこえて、日本社会に「真の宗教性の復権」をもたらすことに資するものでありたいと願うものであります。（抜粋）

大会が終わり、懇親会に席を移したとき、この趣旨が生きている場面をいくつか見ることができた。

あるテーブルから「日蓮宗では、お題目を唱えれば仏に成ることができるというのですか？」という声がかこえた。その結末はわからなかったが、このような「開かれた」場こそが、私たちにとってこれから必要であることは理解できた。そして平成25年1月に開催された第23回法華経・日蓮聖人・教団論セミナーの2人の講

師の発言を思い出した。

このセミナーは、近年、提唱されている新しい大乘仏教成立論をテーマとして開催されたものだが、提唱者のひとり、下田正弘氏（東京大学文学部教授）は、その中で次のように述べていた。

仏塔と僧院とは常に一対です。僧院があるところには何らかの形で仏塔があるんです。それはなぜかということ、僧院、お寺にとっても、仏塔は仏だからなんですね。（『現代宗教研究』第47号 「インド大乘仏教の成立と教団」 2013年3月）

では、仏塔と僧院はどこにあったのか。

都城の外にあるのです。これはほぼ例外がない。そしてもう一つの特徴は、そこに埋葬の地があるんです。たくさんの遺体が埋葬されていたという地層が出てくる。それから、そこに大きなマーケット、つまり交易の場がある。（略）

都城の外というのは、不可触民もいれば、キャラバン隊もやってくる。それから異邦人がやってくる。そして、さまざまな考えとか文化とか、文物を持ってくる。そこに仏塔があるんですね。仏塔がある場所とは、浄と不浄を超えている場所なんです。そしてあらゆる、それこそ差別を越えて交流が起こってくる場所（です）。

セミナーのもう一人の講師、「中世仏教界における遁世—その成立の背景と集団としての成立—」という題で講演した蓑輪顕量師（東京大学教授）は次のように指摘する。

「教団」という名前ですら呼んでしまうと—「教団」というのは明治以降の言葉使いになりますが、その言葉が持っているニュアンスが排他性みたいなものを感じさせてしまいます。しかし中世の時代には、「教団」という言葉自体がありませんし、お坊さんた



平成27年9月18日
株式会社国書刊行会発行

ちが実際に宗派間で敵対していたかというとは決してそんなことはありません。寺院を自由に入出入りするお坊さんたちもいますし、勉強に行き来したりもしております。ただ、自分たちの一番大事にしているものが何かというところで相違を持っていて、他の集団との違いみたいなものが出てきていたのではないかと思います。それでも、反目し合っていたわけではなくて、お互いに入出入りをしているというのが実態だったのではないかと考えております。

教団付置研究所懇話会は、じつはお寺本来のありかたに近いのではなからうか。そして近年増えた、価値観が異なるゲストとホストの対話と交流をもとにした自由なさまざまなお寺の姿は、決して奇をてらったものではなく、インド以来のお寺のありかたに起源をもつものであることが明らかになってきたのである。



第14回年次大会開会式 小林順光宗務総長

小さな縁を繋いで



熊本県の南部、人吉市より24km離れた球磨盆地の東端に位置する町の中心部。町の東部南部は九州山地の一角を占めていて、険しい山を東に越えると宮崎県です。九州山脈に押し出されるように突き出た山の西端から、町の中心部を見守るような高台にそのお寺は建っています。町の人口は四千人ほど。勿論、少子高齢化もずんずん進んでいるいわゆる過疎地です。熊本市までの距離は118km、宮崎市まで120km、鹿児島市まで110kmと、都市からのアクセスはお世辞にも良いとはいえません。

二年前からこのお寺の住職が、オーガニックをキーワードにしたマルシェを春と秋の年二回、試みに開催しています。

マルシェ当日の境内には、農産物、加工品、飲食物、子供服、雑貨、植物などが並び、和やかでゆったりとした時間が流れています。来場者と出店者の境目も曖昧なまま、心のこもった品々を手に、皆が思い思いに飲んで食べておしゃべりをして、ライブに合わせて歌ったり踊ったり。準備から撤収まで、どこからか笑い声や子供の声が聞こえてきます。

人が人を呼び、繋がりが繋がりを求めて、たった二年で様々な人達の交流の場となりました。このマルシェの繋がりに派生したイベントは小さいものも含めると数えきれません。今年の冬には隣町の大きな公園で、オーガニック祭りという大きなイベントも開催されることになりました。

平成27年度の九州教研・布教講習会では、崇城大学の内丸恵一先生による「みずあかり」「本妙寺桜灯籠」など、「灯りのまちづくり」についての発表は、これからの寺院のあり方を考えるにあたって、示唆に富むものでした。

地元のため、町おこしのためと、あまり大風呂敷を広げずに、小さな縁をしっかり繋いで、田舎の空間を上手に開放する。試行錯誤しながらのささやかな活動が、お寺の未来を創っていくのかもしれない。

